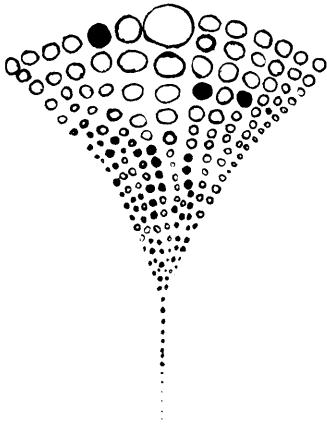


若いお母さんたちへ

「文字」を覚える前に脹むもの

はるにれの会

入江礼子



二女が一日入園の日のことでした。子ども達が在園児に連れられ園内探険に出掛けている間、母親達は、幼稚園のホールで用品の受け渡しの順番を待っていました。二女は、歩いて25分程かかる区立幼稚園に通うことになったため、母親の私もこの園に入園させる母親達のどなたとも面識がありません。勢い、黙って立っていますと、あちこちから色んな会話が断片に耳に入ってきました。その中の一つに、こんながありました。

「ねえ、○○ちゃん、もう読めるようになった？うちのはねえ、自分の名前がやっとなのよ。大丈夫かしら？」私は一瞬、自分の耳を疑ってしまいました。これが、小学校入学前に行なわれる説明会での会話ならいざ知らず、まだ四才になるかならずの子ども達の母親の口から流れ出た言葉なのですから。

母親達にとって「字」を覚えていないことが心配の種になるという現象は、年を追ってエスカレートしているように感じられます。我が家の場合、長女（小三）と長男（小一）は、一年前まで千葉で育ち、幼稚園も、よく遊ぶことを主眼においた私立幼稚園でしたので、少くとも入園時に母親達が「字」を覚えていないことで心配するというような現象は見られませんでした。けれども、そういう幼稚園を選んで入れている親でさえ、卒園間近になると、我が子が余り「字」というものに興味を持っていないと、にわかには動揺しはじめ、「やっぱり幼稚園でもう少しなんとか教えてもらっていけばよかったのではないかしら」というつぶやきを漏らすようになったり

したのです。

建前の上では、「字」は小学校に入ってから学習することになっていきます。けれども、何とか我が子が少しでも有利に、少しでも楽に小学校生活を送れるようにと願う鬼子母神的親心は、建前があくまでも建前であり、本音のところでは、我が子だけは何とか「字」を覚えてから学校に入って欲しいというもののようでした。

ここでは、事の是非はともかくとして、我が家の三人の子どものうちの長男の成長の跡を辿りながら、彼が、何を心の中に脹らましながらか大きくなって来たかを考えてみようと思います。子ども達は、三人三様の育ち方をしていますが、「字」に対する興味という側面に限って見る限り、一番遅かったのは、この長男だったのです。私は、彼から改めて人間の成長というのは、本当に個性的（十人いれば十人違うという意味での）なものだということを学び直しました。四く六才という幼児期の年令に「字」に対する興味がないということが、その子どもの「ひと」としての成長に何ら悪影響を与えるものでは

なく、むしろ、「字」にかかわりのない世界で、いっぱい感じ、味わうものがあり、それが、その人の人としての「根」の部分の養分になるのではないかと改めて感じさせられたのですから……。

〈エピソード〉

「ただいまっ！ねえ、見て見て、これ私が作ったんだから。結構考えちゃったのよね。でも大成功なんだ。」
といつになく興奮して学校から帰って来た長女。その気配に、先に帰宅していた長男が、「どうしたの？何作ったの、あやちゃん。あつ、すごい。これ迷路でしょ。それで朝、学校に箱持っていったのか。僕も作りたいな。おかあちゃん、箱ちょうだい」しまった。箱か。いつもは作りたがり屋の長男のためにダンボール、空き箱等を数個は用意しておくのですが、年に一〜二度おきる（一〜二度しかおきないと言うべきでしょうか）私の整理願望の為、つい二〜三日前、箱という箱を殆んど全部捨ててしまっていたのです。長女が箱を学校へ持って行

くと言った時は、やつのことで一つ見つけたのでした。しかしここで見つけなくては、彼はひっくり返って泣くに違いない、それだけ長男の「ものを作りたい」という気持ちは強いのです。生まれて此の方、何度こういうことでひっくり返ったことか……。というわけで階下に住んでいる義母にも協力してもらって何とか空き箱をみつけ、無事彼に手渡すことが出来ました。それから籠ること30分余り彼は、「出来たっ!!」と言って長女とは一味違った立体迷路の箱を作ったのです。

この二人は一才九ヶ月違い。更に下にもう一人、四才になる二女がいますが、上の二人は、文字通り串刺のお団子のごとく小さい時からよく遊んで育って来ました。よく遊べば遊ぶほど、二人の生まれついて持っているものの違いをまのあたりにすることも多かったわけです。この日のように作ることとなると約二才の年の差などなるのその。長男は、そこで今迄自分の培ってきたものを余すところなく発揮します。ここで長男が作ることに興

味を持ってきた経緯を簡単にみてみようと思います。長男の場合は、「作りもの」の変遷が、とりもなおさず、彼の成長の軌跡でもあるのですから…。

〈休むことのない手〉

長男の手は余り休むことがありません。必ず何かをいじっています。これは今も続いていることで、時には食事の時もコマコマとしたものをいじりながら食べるので、親としては、つい「ちゃんと食べなさい！」と声を荒げる結果になることしばしばです。

◎〇〇一才代

これは世の赤ちゃんの常でしょうが、長男もやはりおもちゃ箱の中、クズカゴの中、砂場でと、ありとあらゆる場面で手を駆使していました。そして、ちよっぴり違うなと思ったのは、私が外出する時でした。生後八ヶ月のころ、親しくしていた社宅のお友達に預かってもらう時、いじるものさえあれば、そしてそれが彼にとってちよっぴりでも珍しいものであれば尚更、出かけて行く私に

は見向きもしないで背中を向けて遊んでいるということがよくありました。私は、長女が、どんなものを見せても、それにはつられず、私が出掛けることを見抜いて泣きはじめるのとは対照的だと思ったものでした。母親を他の人々と完全に見分けることが出来るようになってからも、こんな調子でした。

◎二〇三才代 おまけ 作り

二才代に入ると、おつかいに一緒に行くたびに、丁度百円ぐらいのガムやチョコ菓子についている「変身ロボット」が欲しくて、お菓子の前でひっくり返ったりしたものです。子どもにひっくり返られるというのは、親にとっては、ちよっぴりとした試験の時でもあります。私の場合、長女の時にはそういう経験はなく、子どもにひっくり返られている母親達を見て、「気の毒に」と思うと同時に、ひよっぴりしたら「しつけ」が……と不遜にも思っていました。ところが同じ親が育てても、ひっくり返る子とそうでない子がいるという現実をつきつけられて、これは一体どうということなのだろうかと考えざるを得ま

せんでした。多少自己弁護的になるかもしれませんが、長男の場合は、欲しいものがはっきりしていて絶対にこれでない嫌だ、どうしてもこれが欲しいというものがあるからこそひっくり返るといふことが起つたように思ふのです。二、三才という年代が過ぎ、もうすこし訳が分つてくると、その場を納得して我慢することが出来るようになり、ひっくり返るといふことはなくなつたのですが、欲しいものがはっきりしているという状況は変わりませんでした。

この時期、お菓子そのものよりも「変身ロボット」を家に帰って、作って遊びたいというのが彼の第一の欲求でした。お菓子は姉と分けあって食べていましたし、時には姉の方が多く食べてしまうことだってありました。食べることにそのものにはそんなに執着がなかったわけです。そのかわり作りたくて作りたくてたまらないのです。しかし如何せん、二、三才という年令が年令のため、到底一人で作ることはいけません。いくら説明書を見ても（読んでではなく）出来ないわけです。そこ

で「お母ちゃま、作ってー」と相成るわけです。ここでまた私自身にちょっとした葛藤が起ります。要するに私は、手先のこうしたことが小さい時から苦手なのです。幼ない頃、月刊雑誌の付録を作ることは大嫌いで、母のところを持って行って作ってもらったり、時には四つ違いの妹が作りたがってしまうということがよくありました。私は本さえ読んでいけばよかったです。付録は文字通りオマケで、私にとってはあつてもなくてもよいものでした。でも妹は違いました。雑誌が届くと、まず付録作りからやっていました。そんな妹を、随分変わったことが好きな子だと思つて私は見ていたのです、ところが今度は息子がそうで、おまけに私に作ってくれと言うのですからたまりません。私は何とかそれでも良い母親たろう（？）と小さいオマケと悪戦苦闘しました。ああ、これは子どもを持たなければ絶対に触れなかつた世界なのだから、一つ自分が拡がる世界を持てるようになったと思つてがんばろうと脂汗を流して取り組みました。その結果……、長男と一緒に出来た出来たと飛びあ

がることもありましたが、「ターちゃん、これは私にはちょっとむずかしすぎるわ。お父ちゃんが帰ったら残りをやってもらおうから、ちょっと待ってね」と中途挫折することもしばしば。その度に彼は、今じゃなきやいやだーっと言ってひっくり返って泣きました。そんな光景を何回繰り返したことでしよう。気がつく、長男は、必死に説明書を睨み、ある部分は一人で組み立てられるようになりました。なにしろこなす数が多いのですから、ある程度ベタイン化されている部分も多いわけで、徐々に自分で出来るところが増えていったわけです。それと、いつまで経っても練習効果の見られない母親の無器用さに業を煮やしたのだろうと思います。買ってもらったのは、説明書とにらめっこという日々が続きました。組み立てたものは、例えばカメラロボ（カメラロボット）の場合は、ある操作で、カメラになったりロボットになったりするのです、それを持って気の合う友達と、しゃべりながら遊んだり、その勢いで外に出て遊んだりということが多くありました。オモチャの方もやはりこのおま

けと同種で、もっと精巧に出来ている変身ロボットの種類（ジェットロボ、カセットロボ、タマゴラス等）を誕生日に買ってもらったり、サンタさんに持ってきてもらったりしたのです。ともかく、自分の手を加えることによって完成するものや、操作することによって変化するというところに魅かれていたようです。こういうものばかりでなく、ブロック作りもこの時期、友達とよく作って遊んでいました。いずれにせよ、自分の手でいじって変化させたりすることが彼にとって最重要のことであるようでした。

◎四〜五才代 空箱利用のロボット作り

おまけを作ることに対する興味は尽きることがなく、新型が登場する度に、それにも手を伸ばしていきました。この頃になると、もう、私に作ってくれといってくることは、殆んどなくなりました。説明書と、首っぴきで作ってしまうのです。首っぴきといっても、彼の場合は、「字」を読んで作るのではなくありません。「字」らしいものでわかっているのは数字だけです。これも必要に応

じて、自然に覚えてしまったようです。(私には教えた記憶がありません)それを頼りに、説明書の図の部分をつかんで、穴のあくほど睨んで、それで作って行くのです。「説明書があれば大丈夫」というのが、この頃の彼の口癖でした。

幼稚園に行きはじめ、空箱や、ヤクルトの容器を自由に使わせてもらえるようになると今度は、ロボット作りが始まりました。来る日も来る日もロボットをかかえて帰ってくるのが続きました。年少の後半から、年長にかけて、ことに多くみられました。作って帰ったものは、一切捨ててはいけないうと、とっておいて欲しいと言うので、我が家のダンスや棚の上は、彼の「作りもの」で一杯になりました。そして年長の時の年の暮れ、作ったものを写真に撮って、どうしても残しておいて欲しいというものを以外は処分したのです。彼と一緒に焼却炉に運んだのですが、その量の多さには、改めて驚いてしまいました。

この頃は、作るもの大きさが、めっきり大きくなっ

てきたのが目につきました。ダンボールを切り刻んで、色々なものを作りはじめました。まだカッターが使えなかったので穴あけの度に、又、私の出番がまわってきました。けれどもやはりここでも、長男の方が熱心さや工夫の点で私より数段まさり、私の出番もまたそれに反比例して減っていききました。

◎六〜七才代 生体メカ作り

皆さんは「生体メカゾイド」という一種の組み立て恐竜ロボットを御存知でしょうか。ゴジラに見立てたゴジユラスの他、ウルトラザウルス、マンモス等、古代に活躍した恐竜にその原型を求めた組み立てロボットなのです。大小様々、多くの種類があり、さらに子ども達の間で「いいもの」と「わるもの」に分かれているのです。これこそ、長男の今迄の「作りもの」の総決算といえるほどの魅力を備えたものでした。まず自分の手で組み立てるものであり、彼が心ひかかっている恐竜達を模したものであるということ。組み立て後は、電池或は、ゼンマイの力で動くということ。そして、それらを使って数人

で遊ぶことが出来るということ。こんな魅力ある条件を満たしているものですから、第一号のゴジュラス製作からそのとりことになりました。ゴジュラスだけは、まだ一人では出来ず、姉ではなく、姉の友人の当時二年生の女の子と、やはり半日がかりで挑戦したのです。結果、一部動かないところが出たものの、それは父親の夜の努力によって補われ、翌日には遂に完成しました。手足を動かし、火を噴くがごとく口の中を赤く点滅させるゴジュラス。それは長男ならずとも、ちょっととした感動シーンでありました。ここまで来るのに、何度じれて泣いたことか……。そしてその後は、こういう大物も、説明書さえあれば自力で作れるようになったのです。このころ（年長組のころ）でさえ、説明書は、やはりじつと睨むためのものでした。それでも作ることは可能なのです。ですから彼にとって説明書は本当に大切なものなのです。我が家には、手垢にまみれ、ボロボロになったそれらが、幾つものころがっています。

さて、少々長々と、長男の「休むことのない手」について述べてきましたが、彼はこうして、大方の子ども達が「字」に対して興味を向ける時期にも、手を動かしたり、体を動かしたりする方（ここには書きませんでした）に大部分の時間を費していました。時々「字」を見てはいたので、いくらか読めたりはしましたが、学校に入ってから、ロボット読みといわれるタドタドしい読み方が続いていました。

それでは、彼は果たして、学校生活で躓いたでしょうか。答えは否です。確かに「読む」ということだけを切り離してとり出せば、まだまだの要素はいっぱいあるということになります。けれども、手をいっぱい動かしていたということは、ものごとをあちこちから見たり考えたりする力につながっていったように思えます。平面的に考えるのではなく、立体的なものを感じる感覚とでもいったらよいでしょうか。言われたことをそのまま丸呑みにするのではなく、自分の手にとって捉えなおす力とも言えるもの。卑近な例でいえば時間を逆算して考え

るということが自然に出来たり、数字が単に数字ではなく、かたまりとして考える力があつたり、あちこちから見て考えるので、皆がごまかされても、簡単な手品のトリックを見破つたりと、いくらでも挙げられます。私などは、むしろ直線的、平面的思考をする部類の人間なので、そういう彼の感覚に、いくらか驚きの眼をもってみてしまうのです。文字化されない様々の経験は深い体験として、根付くように思われてなりません。いつの日か、これが、抽象化の一步としての文字に結びついた時、本当に裏付けある力として芽が出てくると思えてならないのです。本を読んでもらうことは大好きな長男。ここでも文字を覚えるのが遅かったゆえに、聞いて楽しむ世界を堪能しています。

親はとかく、早く「字」の世界、形の見える世界に子どもを追いやりがちです。特に、学校という社会に入ることが目の前にぶらさがってくると、余計そうさせがちです。前にも述べたように、親のあせりが、加速度的に強まってきて、子ども達は、より低い年令で形ある世界

に追いやられて行きます。形ない世界をじっくりと味わい、ふくらます以前に……。もちろん、個人差があることは前にも述べた通りですが、長男のようなタイプの子どもに、早く早くと「字」をおしつけてしまうことは、無意味だと思ふのです。子どもが自らやりたいことがあるのなら、少々大変でもそちらを大事にすることがやはり必要だと思ひます。私の場合も、この長男と共に歩む（時には、添いきれないこともありましたが）ことで、はつきりと気付かされたように思ひます。大人の目には見えなくとも、脹んでいるものは、いっぱいあるのですから。

一般的には、男の子に多く見受けられるこのタイプの子ども達が、ある幼ない時期に焦点をあてて、そこで切つて評価されるのではなく、もっと長いサイクルで成長を見守つて欲しいと、親や接する先生方に願わずにはいられません。